

岩村田商店街

(岩村田本町商店街振興組合)

長野県佐久市

インバウンド

地域協働

新陳代謝

生産性向上

ポイント

地域密着顧客創造型商店街の次なる一手は地域ブランドの創成と大型店と連携した地域電子マネーの活用。さらなる価値の創造へ。

基本データ

所在地	長野県佐久市岩村田
人口	約 10 万人
電話/FAX	0267-54-8339 / 0267-54-8339
URL	http://iwamura.com/
会員数	71 名
店舗数	61 店舗(小売業 23 店、飲食業 12 店、サービス業 11 店、金融業 2 店、不動産業 1 店、医療サービス業 1 店、その他 11 店)
商店街の類型	生活支援型
主な客層	主婦、サラリーマン / 60 歳代、30 歳代

商店街概要

当商店街は江戸時代から続く中山道 22 番目の宿場町。佐久甲州街道との分岐点も兼ねていることから、商業の町として昭和 50 年代までは大いに栄えた商店街であった。しかし、平成 10 年の長野オリンピック開催に伴う新幹線佐久平駅や上信越自動車道佐久 IC の開業、大型商業施設の集積により、佐久市における当商店街の売り場面積は激減。商店街内にあったスーパーも移転し、生鮮食品を扱う店のない商店街になったばかりか、平成 12~13 年には 42 店舗中 15 店舗が空き店舗という状態であった。この状況に危機感を感じた若手経営者が平成 8 年に振興組合を立ち上げ、様々な商店街活性化策を実施。完全閉店店舗は 3 店舗にまで減少している。

取組の背景

ワークショップで商店街の位置付けを転換

地域密着型の商店街として長年繁栄していた岩村田商店街だが、ナショナルチェーンの進出により、顧客を誘引できる魅力ある商店や仕掛け作りが課題となっていた。さらには、店主の高齢化とともに後継者不在の店が増え、平成 12 年時点では 5~10 年後に閉店を余儀なくされる店舗の割合は 68% と高率である事が判明していた。

このような課題解決に向けて、当商店街では、自分たちがどういう街にしたいのか、という視点に立った「ビジョン作り」「ゾーニング」に関わるワークショップを平成 17 年度から 25 年度まで各年度内 3~4 回実施。このワークショップを進める中で、「商店街」の位置付けを「商店街があるから街がある」から「街があるから商店街がある」という発想に転換した。

コンパクトシティ化による、「歩いて買物が楽しくできる街づくり」という方向性で、商店街が地域の人々の日常を支える役割を持ち、地域と共存し、共に働き暮らしていく街づくりを進めていくことにした。

取組の内容

地域ブランドの創成と地域電子マネーの活用

当商店街では、地域密着顧客創造型商店街を目指

し、平成 14 年から 21 年の間にコミュニティスペース「おいでなん処」や惣菜専門店「本町おかず市場」、起業家支援のチャレンジショップ「本町手仕事村」、学習塾「岩村田寺子屋塾」、短時間託児や子育て相談機能をもつ支援施設「子育てお助け村」を次々に開設してきた。



全国初の商店街直営学習塾「岩村田寺子屋塾」
高校生が活躍するイベント会場としても活用

現在もこれらの活動を継続しているが、この中でも特に「本町手仕事村」については、「本町手仕事村」を活用した事業者がその後商店街に出店を果たしたことで、魅力ある店舗の集積や後継者問題の解決に対して有効な手段と認識していた。

この活動結果を踏まえ、平成 26 年には、飲食の起業を目指すチャレンジショップ機能をもつ複合商業施設「こてさんね」を新たに開設。さらに、平成 28 年には手に職を持った起業家のインキュベーション施設である「やって店」も開設。その他、通信制高校や高校生チャレンジショップの設置による商学連携の取組や、商店街直営「青春食堂」の開業を通じた地域ブランド創成と地産地消の推進により、当商店街ならではの付加価値を創出するとともに、

地域と共存する街づくりの推進を図っている。

また、近隣に立地する大型商業施設「イオン」については、商圈を広域に面として捉えることで、大型商業施設も商店街集客のひとつの有効な要素と考え方を転換。平成22年には、「イオン」の発行するワオンカードと連携し、商店街のポイントも同じカードで貯めることができる「佐久っ子ワオンカード」を開発した。買い物の際に小銭を持ち歩いて数えるわずらわしさを解消し、地域電子マネーとして広く活用を促すことで、生産性の向上と楽しくショッピングができる環境づくりを進めている。



商店街直営の複合商業施設「こてさんね」

取組の成果

地域に根差した取組が大きな効果を生む

平成26年に開業した複合商業施設「こてさんね」の来館者数について、平成27年は3,250人、平成28年は3,780人と増加しており、商店街の来街者数増にも寄与している。「こてさんね」のチャレンジショップ活用事業者については、平成29年10月時点で13事業者が一定の成果を収めた後にさらに広い事業場を求めて巣立っている。これらの動きにより岩村田商店街を含む岩村田本町周辺エリア全体で開業する若手飲食事業者が増加するという相乗効果が生み出されている。

また、地域電子マネー「佐久っ子ワオンカード」については、平成29年10月現在の発行カード枚数は約2万5千枚、加盟店は61店舗、発行ポイント数は年間約250万ポイントと平成22年の発行以来、徐々に地域に浸透している。今後は、行政や地元企業によるポイント発行も視野に入れ、地域電子マネーとしての役割をさらに大きくしていきたいと考えている。



地域電子マネー「佐久っ子ワオンカード」

実施体制

17名の理事が、1人1事業を担当し、責任を持って運営している。また、各事業についてはその内容に応じて、佐久商工会議所、広域の連合商店会、佐久市、佐久平総合技術高校、鹿島学園高校、佐久市料飲組合、佐久市バスケットボール協会などと連携して実施している。

平成29年度からは、さらにその協力体制を広域化し、それぞれの事業に関連する、様々な団体、NPO、任意団体などとも連携をとって、「様々な人々が関われる」街にシフトしている。街づくりについては、全国でも有数のタウンマネージャーを投入して、佐久市、佐久商工会議所との緊密な連携の中で「佐久市の基本計画」を平成30年度に策定予定。これを機に、基礎自治体、商工会議所との連携に加え、今後創設する「まちづくり会社」や、関連団体との協力体制の中で、さらに万全の事業運営体制を実現させる方針だ。

キーパーソンからのコメント



岩村田本町商店街振興組合理事長 阿部 真一

伝統の中に生きる新たな力

私は和菓子屋の4代目ですが、老舗の店主が頑張っているところにこの商店街の特徴があると思います。

昔から交通の要衝として栄えた宿場町ならでの、「よそ者をひきつける力」と、「よそ者を受け入れる度量」がこの街には息づいており、その一方で、全国各地や海外の「まちづくり先進地区の研究」にも余念がなく、10年、20年先を見据えた発想が街の活性化の原動力となっています。

「商店街」から「生活街」へ

商店街を取り巻くエリアは“畑”であり、そこを耕し続けないと商店街はないし、子孫に引き継ぎません。平成8年に下売上をして日本で一番若い振興組合となった岩村田の理事たちも現在はアラ還（60歳）となりました。一方で着実に若い世代も動き始め、「商店街」の役割も「住みたくなる街のお買物ゾーンを含んだ生活街」へと、その役割を変えつつあります。岩村田商店街では、これまで培ってきた「街の力」が集約されて、これまでになかった新たな「耕し」が始まっています。